



Title	チュヴァシ語の否定辞marを含む修飾構造と派生構造
Author(s)	菱山, 湧人
Citation	北方言語研究, 13, 1-15
Issue Date	2023-03-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/89076
Type	bulletin (article)
File Information	01_Hishiyama.pdf



[Instructions for use](#)

チュヴァシ語の否定辞 *mar* を含む修飾構造と派生構造

菱山 湧人

(東京外国語大学非常勤講師)

キーワード：チュヴァシ語、否定辞、修飾、派生

0. はじめに

チュヴァシ語（チュルク諸語オグル語群）の否定辞 *mar* は、他のチュルク諸語の否定辞と同様に、主に非動詞述語に後置されて文を否定する（例：Věsem yivār *mar*. [それ.PL 難しい NEG]「それらは難しくない」）。加えて、形容詞をはじめとした先行要素と共に修飾語として機能したり（例：avan *mar* yapala [良い NEG もの]「良くないもの」）、派生元となることもある（例：tērēs *mar*-lāx [正しい NEG-NMLZ]「正しくないこと、不正」）。しかし、これらの機能に関する先行研究の記述は不十分である。

本稿¹では、コーパスから抽出された例に基づき、チュヴァシ語の否定辞 *mar* を含む修飾構造と派生構造について詳細に記述する。次に、他の主なチュルク諸語の否定辞と対照を行い、これらの構造がチュヴァシ語に特徴的なものであることを示す。最後に、否定辞 *mar* を含む修飾構造と派生構造の通時的発展について考察を行い、これらがロシア語の影響によって発展した可能性が高いことを主張する。

本稿の構成は次の通りである。まず第1節で先行研究の記述をまとめ、問題提起を行う。次に第2節で調査方法と調査結果について述べ、第3節で考察を行う。最後に、第4節でまとめと今後の課題を挙げる。

なお、特にことわりのない限り、外国語文献の翻訳、ラテン文字転写²、例文番号、グロス、文字飾り³、表、表番号は筆者による。

1. 先行研究

本節では、主な先行研究の否定辞 *mar* に関する記述をまとめ、問題提起を行う。

mar が主節述語に後置されて文を否定することに関しては多くの先行研究に記述がある。Clark (1998: 450) は、「後置される語 *mar* ‘(it is) not’ は構成要素を否定するために用いられる」と述べているが、*mar* が主節の非動詞述語に後置された例 (1) のみを挙げている。

¹ 本稿の草稿は、日本北方言語学会第5回大会で発表し、参加者の方々から貴重なコメントを賜った。ここに記して感謝申し上げたい。有益なコメントを下された2名の査読者にもお礼申し上げたい。ただし、本稿における誤謬は全て筆者の責に帰するものである。

² ロシア語の音韻体系に従って発音される比較的新しいロシア語からの借用語のラテン文字転写は Timberlake (2004: 25) にある linguistic 方式に従う。異なる転写法であることを示すため、それらの借用語は斜字体で示す。

³ 例文中で、否定辞を含む統語的まとまりは下線で、否定辞および特に問題となっている部分は太字で示す。

(1) Pirěn yal-tan vārman ayakra mar.

1PL.GEN 村-ABL 森 遠くに NEG

「私たちの村から森は遠くない。」

(Clark 1998: 450)

なお、mar は一部の動詞述語にも後置される。Sergeev, Andreeva and Kotleev (2012: 368, 386, 389) によると、命令形 (1 人称)、形動詞未来、形動詞義務は、mar によって否定される (例: vul-am mar [読む-IMP.1SG NEG] 「私は読むまい」、yurla-malla mar [歌う-OBLG NEG] 「歌ってはならない」)⁴。

否定辞 mar にはほかにも、述語以外の構成要素を否定する場合、「いいえ」の意味で用いられる場合、「～だけでなく」の意味で接続詞として用いられる場合など、複数の機能がある。本稿では、否定辞 mar が先行要素と共に修飾語として機能する場合や、派生元となる場合に注目する。これらの機能について記述している先行研究は、管見の限りでは少ない。

チュヴァシ語・ロシア語辞書である Andreev, Gorškov, Ivanov et al. (1985) は、mar が形容詞とともに名詞を修飾する例 (šamrāk=ax mar xērārām [若い=EMPH NEG 女性] 「それほど若くない女性」) や、名詞化して目的語として機能する例 (kirlě mar-a an kalaś [必要な NEG-DAT/ACC PROH 話す.IMP.2SG] 「必要でないことを話すな」) を挙げている。Sergeev, Andreeva and Kotleev (2012: 421) は、mar が形容詞と共に動詞を修飾する例 (2) を挙げている。しかし、いずれの先行研究も例を挙げるにとどまっている。

(2) Xěvetli inke yal+yiš-pa pělěš+xurāntaš-lă pul-as pirki

PN おばさん 同郷人-INST 知人+親戚-ADJLZ なる-PTCP.FUT ついて

saxal mar šuxāšla-nă.

少ない NEG 考える-PRF

「ヘヴェトリおばさんは、村人と仲良くなることについて、少なからず考えた。」

(Sergeev, Andreeva and Kotleev: 2012: 421)

Pavlov (2014: 388) は、形容詞 tasa 「清潔な」と否定辞 mar の組み合わせから、文法的形式だけでなく派生語の形成が可能であるとし、以下の例を挙げている。

⁴ これら以外の多くの動詞形式は、動詞語幹に付加する否定接辞 -mA によって否定される。ただし、2・3 人称命令形は前置否定小辞 an によって否定される。存在否定は šuk 「ない、いない」によって表される。

a) 文法的形式⁵

tasa marr-i 「(その人たちのうち) 清潔でない人」

tasa mar-sker 「(一人の) 清潔でない人」

tasa mar-tarax 「より清潔でない」

b) 派生語

tasa mar-läx 「清潔でないこと」

tasa mar-lan- 「清潔でなくなる」

tasa mar-lat- 「清潔でなくする」

Pavlov (2014: 388-389) は、これらの接辞が形容詞 *tasa* にも付加しうることから、これらの例で *mar* は否定を意味する派生接辞の類似物として機能していると述べている。Andreev, Gorškov, Ivanov et al. (1985) には、*mar* を含むいくつかの (分かち書きされていない) 派生語が掲載されている (例: *tëršmarläx* 「不正」、*avanmarlan-* 「良くなる」など)。

上述のように、否定辞 *mar* が先行要素と共に修飾語として機能したり、派生元となる場合に関する先行研究の記述はあるものの、十分とは言えない。本研究では、様々な例を観察し、否定辞 *mar* を含む修飾構造と派生構造について詳細に記述する。また、これまで筆者が観察してきた限り、類似の構造は他の主なチュルク諸語ではほとんど見られない。本研究では、他の主なチュルク諸語の否定辞と対照し、否定辞を含む修飾構造と派生構造がチュヴァシ語に特徴的なものかどうかを明らかにする。さらにそれを踏まえて、これらの構造の通時的発展を考察する。

2. 調査

本節では、2.1 節で調査方法について述べ、2.2 節で調査結果を示す。

2.1. 調査方法

本研究では、チュヴァシ語を対象にコーパス調査を、他のチュルク諸語を対象にコンサルタント調査を行った。

コーパス調査では、オンラインコーパス *Čavaš čelxin ikčelxellě šüpši*⁶ [チュヴァシ語二言語コーパス] (以下 CCIS) を用いて、否定辞 *mar* を含む様々な例を抽出した (以下、出典のない例文は CCIS から得られたものである)。例えば、形容詞と否定辞 *mar* の組み合わせであれば、CCIS で出現頻度の高いものを中心とした任意の形容詞と *mar* を、完全一致を意

⁵ 屈折形式を指すと考えられる。注 9 で後述する通り、ソ連・ロシアの先行研究は *-i*, *-sker* を屈折接辞とみなしている。なお、*-i* は先行する語の末子音の二重化を引き起こすため、*mar* は *marr* となる。

⁶ 総語数 1358 万語 (2022 年 11 月 30 日現在) のタグなしコーパス。多くの例文にはロシア語の対訳が付いている。2022 年 11 月現在、リアルタイムで更新作業 (新テキストの追加、ロシア語訳付け作業) が行われている。新聞・雑誌の記事、ニュース、散文集、宗教関連のテキストを含む。

味するダブルクォーテーションで囲んで入力し検索した（例：avan mar「良くない」であれば“аван мар”）。mar に比較接辞が後続した形 mar-tarax であれば мартарарак、mar に動詞派生接辞 lan- が後続した形 mar-lan- であれば、末尾に任意の文字列の連続を意味するアスタリスクを付して марлан* と入力して検索した。

コンサルタント調査では、タタール語（北西語群）、トルコ語（南西語群）、ウズベク語（南東語群）における否定辞の振る舞いに関して、容認度調査を行った⁷。コンサルタント（表1）に CCIS から抽出されたチュヴァシ語例文（筆者が適宜簡略化した）の直訳を提示し、「容認可能」、「違和感がある (?)」（違和感が強い場合は (?)）、「容認不可 (*)」のいずれかを選んでもらう形で容認度を調べた。

表1：コンサルタント情報

氏名	母語	生年	性別	出身地
R. Y. 氏	タタール語	1974	男	ロシア連邦タタールスタン共和国
O. T. 氏	トルコ語	1991	男	トルコ共和国イスタンブール
Z. F. 氏	ウズベク語	1997	女	ウズベキスタン共和国サマルカンド

2.2. 調査結果

本節では、2.2.1 節で否定辞 mar を含む修飾構造と派生構造について述べ、2.2.2 節で他のチュルク諸語の否定辞と対照を行う。

2.2.1. 否定辞 mar を含む修飾構造と派生構造

本節ではまず否定辞 mar が先行要素と共に修飾語として機能する場合について述べ、次に派生元となる場合について述べる。

1) 否定辞 mar を含む修飾構造

否定辞 mar は先行要素と共に用いられて、形容詞（または形容詞相当句）と類似の形態統語的振る舞いをする事が分かった。チュヴァシ語における形容詞の主な形態統語的振る舞いは次の通りである。形態面では比較接辞 -(tA)rAx⁸ が付加しうる（例：layăx-rax「より良い」）。統語面では、述語や修飾語（名詞修飾、動詞修飾）として機能するほか（例：layăx vîrăn「良い場所」、layăx pël-「良く知る」）、格接辞を直接とって文中で名詞的に（主に目的語として）と機能しうる（例：layăx-a šan「良いことを信じろ」）。先行要素＋否定辞 mar も、

⁷ これらの言語を調査対象とした理由は、これらの言語が、チュルク諸語の主な語群（北西・南西・南東）の代表的な（話者数の多い）言語だからである（北西語群からは、話者数の最も多いカザフ語ではなく、筆者の研究対象言語であり、チュヴァシ語の近隣言語であるタタール語を選択した）。いずれの言語も、チュヴァシ語の否定辞 mar と同様に、主に非動詞述語に後置されて文を否定する否定辞を持つ（タタール語 tûgel、トルコ語 değil、ウズベク語 emas）。

⁸ 母音調和による異形態を持つ。以下、本文中で用いる接辞の代表形は、母音調和などで交替する部分を大文字で示す。

形態面では比較接辞が付加しうる。統語面では、述語や修飾語（名詞修飾、動詞修飾）として機能するほか、格接辞を直接とって文中で名詞的に（主に目的語として）用いられることもある（後者の場合、多くは **kirlě mar** 「必要ないこと」や、**kirlě+kirlě mar** 「取るに足らないこと」を含む）。先行要素としては形容詞が多く見られるが、名詞、副詞、形動詞なども見られる。また、句が先行要素となることもある。

形容詞+**mar** に比較接辞が付加し名詞を修飾する例：

- (3) **śav pëlterü-re pallă mar-tarax yapala-sem**
 その 知らせ-LOC 明らかな NEG-COMP 物-PL
pul-nă pul-san=ta
 ある-PRF である-CVB=も
 「その知らせに、より不明な（明らかでない）ものがあつたとしても」

形容詞+**mar** が名詞的に用いられる例：

- (4) **Měn kirlě mar-a kalaś-at-ăn esě.**
 何 必要な NEG-DAT/ACC 話す-PRS-2SG 2SG
 「なに必要でないことを話しているんだ、お前は。」

名詞+**mar** が名詞を修飾する例：

- (5) **yut śēršiv-senč-i čávaš mar āščax-sem**
 よその 国-PL.LOC-ADJLZ チュヴァシ人 NEG 学者-PL
 「外国にいるチュヴァシ人でない学者たち」

形容詞相当句+**mar** が名詞を修飾する例：

- (6) **manevr-senče «protivnika» kur-nă čuxne-xi yevěr mar sisēm**
 演習-PL.LOC 敵軍 見る-PTCP.PST時に-ADJLZ ような NEG 感覚
 「演習で『敵軍』を見たときのようなでない感覚」

副詞相当句+**mar** が動詞を修飾する例：

- (7) **Īvāl-ě amāšě śine, kěšēnn-i asl-i śine pāx-nă**
 息子-3.POSS 母.3POSS に 年下の-NMLZ 年上の-NMLZ に 見る-PTCP.PST
pek mar pāx-at'.
 のように NEG 見る-PRS.3SG
 「息子は母親を、年下が年上を見るようにでない感じで見ている。」

2) 否定辞 **mar** を含む派生構造

先行要素+否定辞 **mar** には、副詞派生接辞 **-Ān, -IA**、名詞派生接辞 **-i, -sker, -IĀx**、動詞

派生接辞 -lAn, -lAt が付加しうることが分かった。

副詞派生接辞 -Ān, -lA と名詞派生接辞 -i, -sker⁹ は、句を入力とした派生に加え、屈折接辞を内包した派生が可能な統語的派生接辞 (江畑 2018, 2020) である。副詞派生接辞 -Ān が付加した例は 91 例抽出され、うち 46 例は「良い」を意味する形容詞 *avan*, *layāx*, *irā* のいずれかを含んでいた。副詞派生接辞 -lA が付加した例は 6 例抽出され、うち 3 例が否定代名詞 *nim* 「何も (～ない)」を含んでいた。

形容詞+mar に副詞派生接辞 -Ān が付加した例：

- (8) *Voropaev* *xāy-ne* *layāx* *marr-ān* *tuy-r-ě*.
PN 自身.3SG-DAT/ACC 良い NEG-ADVLZ 感じる-PST-3SG
「ヴォロパイエフは、自身 (の具合) を良くないように感じた。」

否定代名詞+mar に副詞派生接辞 -lA が付加した例：

- (9) *Vāl* *Maržarov* *šine* *nim* *mar-la* *pāx-sa* *il-č-ě*.
それ PN に 何も NEG-ADVLZ 見る-CVB 取る-PST-3SG
「その人は、マルジャロフを何でもないかのように見た。」

名詞派生接辞 -i, -sker が付加した例も多く見られた (前者が付加したものは意味的に制限的、後者は非制限的である¹⁰)。-sker が付加した例は 80 例抽出され、うち 18 例は *pallā mar-sker* 「(素性が) 明らかでない者」であった。

形容詞+mar に名詞派生接辞 -i が付加した例：

- (10) *Kirlě-rex* *ěš-šěn* *yalan=ax*
必要な-COMP 仕事-PURP いつも=EMPH

kirlě *mar-taraxx-i-ne* *pārax-at-ān*.
必要な NEG-COMP-NMLZ-DAT/ACC 捨てる-PRS-2SG

「より必要なことのために、いつもより必要でないことをお前は捨てている。」

⁹ ソ連・ロシアの先行研究で -i, -sker は、名詞と形容詞の文法カテゴリーである区別カテゴリー (категория выделения) を表わす屈折接辞であるとされている。Pavlov (1985: 13) によると、このカテゴリーは、自立語がその特徴によって、談話中で前に言及されたか、文脈または状況によって知られている実質的な対象を区別することを可能にする形態論的カテゴリーである。Luutonen (2011: 47) は категория выделения を the category of distinction と訳している。本稿では、これらの接辞が品詞を転換するなど、派生接辞としての特徴を持つことから、これらを屈折接辞ではなく派生接辞であるとみなす。

¹⁰ 例えば、*tasa mar* 「清潔でない」に -i が付加した *tasa marr-i* は指示対象が制限され、「(その人たちのうち) 清潔でない人」のような意味になる一方、-sker が付加した *tasa mar-sker* は指示対象の補足説明で、「(一人の) 清潔でない人」のような意味になる。

形容詞+mar に動詞派生接辞 -lAn が付加した例：

- (15) ... temënle irä mar-lan-sa kay-r-ě.
 どうしてか 良い NEG-VBLZ-CVB 行く:AUX-PST-3SG
 「…どうしてか、良くなくなっていった。」

これらの派生語は分かち書きされないことが多い。例えば、pallāmarlāx「不明」は5例と、分かち書きされる例(25例)よりかなり少ないが、tēršmarlāx「不正」は60例、avanmarlan-「良くなる」は20例、irāmarlan-「良くなる」は4例と、分かち書きされる例(それぞれ7例、16例、3例)より多い。他に、avan や irā と同じく「良い」を意味する形容詞 layāx を含んだ layāxmarlan-「良くなる」は20例、tasa「清潔な」を含んだ tasamarlan-「清潔でなくなる」は9例抽出された。

これらの接辞が付加したものは、統語(句が先行要素となりえない、先行要素との間に要素が介在しない)、音韻(1箇所のみアクセントがある:pallāmárlāx(*pállā márlāx))、表記(分かち書きされない場合が多い)、辞書(見出し語として登録されているものが多い:pallāmárlāx「不明」、tēršmarlāx「不正」、avanmarlan-「良くなる」など¹¹⁾の4つの基準から、1語であると考えられる¹²⁾。

2.2.2. 他のチュルク諸語の否定辞との対照

調査の結果、トルコ語とウズベク語では否定辞が先行要素と共に修飾語や目的語として機能せず派生元にもならないこと、近隣言語のタタール語でもこれらの機能が一般的でないことを示唆する結果が得られた。

まず、それぞれの言語における形容詞+否定辞の統語的機能(名詞修飾、動詞修飾、目的語)に関する調査結果を示す(cvはチュヴァシ語、ttはタタール語、trはトルコ語、uzはウズベク語の略称である)。

名詞修飾

- (16) cv. Ku utrav avan mar vīrān.
 tt. ?Bu utraw yaxši tügel urīn.
 tr. *Bu ada iyi değil yer.
 uz. *Bu orol yaxshi emas joy.
 これ 島 良い NEG 場所
 「この島は良くない場所だ。」

¹¹⁾ 辞書に登録されているものうち一部は、欠如を表わす接辞 -sĀr を含む語が同義語として挙げられている。例えば、Andreev, Gorškov, Ivanov et al. (1985) には、tēršmarlāx の同義語として tēršsĕrlĕx が挙げられている。

¹²⁾ 分かち書きされない場合も mar には母音調和が及ばない。しかし、これは1語であるとみなすことへの反証にはならない。チュヴァシ語には複数接辞 -sem や名詞化接辞 -i のように、母音調和しない接辞も複数存在するからである。

トルコ語とウズベク語では否定辞ではなくコピュラ動詞の否定形動詞形（トルコ語：ol-ma-yan ウズベク語：bo‘l-ma-gan [である-NEG-PTCP]「～ではない」）を用いて表現するという。チュヴァシ語では逆に、上のような例で *mar* の代わりにコピュラ動詞の否定形動詞形 *pulman* [である-NEG.PTCP] は用いられないようである（CCIS からは *avan pulman* が名詞を修飾している例は抽出されなかった）。

動詞修飾

- (17) cv. Esë tërës **mar** kal-at-än.
 tt. *Sin döres **tügel** äyt-ä-seŋ.
 tr. *Sen doğru **değil** söylü-yor-sun.
 uz. *Sen to‘g‘ri **emas** ayt-a-san.
 2SG 正しい NEG 話す-PRS-2SG
 「君は正しくなく（間違っ）話している。」

トルコ語では「間違っ」を意味する形容詞 *yanlış, hatalı* を用いるという。タタール語のコンサルタントは自然な表現として「君は正しく話していない」、ウズベク語のコンサルタントは「君の話は正しくない」のような文を提示した。

目的語

- (18) cv. Esë kirlë **mar-a** kalaś-at-än
 tt. Sin kiräk **tügel-ne** söyli-y-seŋ.
 tr. ??Sen gerek **değil-i** konuş-uyor-sun.
 uz. *Sen kerak **emas-ni** ayt-ayap-san.
 2SG 必要だ NEG-ACC 話す-PRS-2SG
 「君は必要でないことを話している。」

トルコ語とウズベク語では、否定辞ではなくコピュラ動詞の否定形動詞形に対格を付した表現を用いるという。ウズベク語では、*kerak*「必要だ」に欠如を表わす接辞 *-siz* が付加した *keraksiz*「必要ない」と *narsa*「こと」を用いた表現 *keraksiz narsani*「必要ないことを」が最も自然だという。

次に、派生接辞を付加した場合に関する調査結果を示す。それぞれの言語でチュヴァシ語の派生接辞（名詞派生接辞 *-IÄx*、副詞派生接辞 *-IA*、動詞派生接辞 *-IAn*）に機能的に対応する派生接辞を付加した例の容認度を調査した。その結果、いずれの言語でも「容認不可」と判定されたため、これらの言語では否定辞に派生接辞が付加できないと考えられる。

名詞派生接辞

- (19) cv. Manšän ku têrês mar-lăx.
 tt. *Minem öçen bu döres tügel-lek.
 tr. *Benim için bu doğru değil-lik.
 uz. *Men uchun bu to'g'ri emas-lik.

私にとって これ 正しい NEG-NMLZ

「私にとってこれは正しくないこと（不正）だ。」

タタール語のコンサルタントは、自然な表現として *döreslek tügel* 「正しいことではない」を挙げた。トルコ語とウズベク語のコンサルタントは、「不正」を意味する語彙（トルコ語：*adaletsizlik* ウズベク語：*adolatsizlik*）を用いた表現を挙げた。

副詞派生接辞

- (20) cv. (Kunta kaşni şine) avan mar-la păx-at-ăn.
 tt. *(Monda härber keşegä) yaxşı tügel-çä qarï-y-siñ.
 tr. *(Burada her bir kişiye) iyi değil-ce bak-ıyor-sun.
 uz. *(Bu yerda har kishiga) yaxshi emas-cha qara-yap-san.

ここで全員を 良い NEG-ADVLZ 見る-PRS-2SG

「君は（ここで全員を）良くない風に見ている。」

タタール語とウズベク語で、自然な表現は「悪い」を意味する形容詞を用いた表現（タタール語：*naçar* ウズベク語：*yomon*）だという。トルコ語では、{*kötü/iyi ol-ma-yan*} *bir şekil-de* [{悪い/良い である-NEG-PTCP} 一 形-LOC] 「悪い形で/良くない形で」のように表現するという。

動詞派生接辞

- (21) cv. Pülëm tasa mar-lan-ç-ë.
 tt. *Bülmä çista tügel-län-de.
 tr. *Oda temiz değil-len-di.
 uz. *Xona toza emas-lan-di.

部屋 清潔な NEG-VBLZ-PST(-3SG)

「部屋は清潔でなくなった。」

いずれの言語でも、「汚くなった」という動詞を用いた表現（タタール語 *piçrandi* トルコ語：*kirlendi* ウズベク語：*kirlandi*）が自然であるという。

上述のように、他の主なチュルク諸語では否定辞を含んだ修飾構造と派生構造はほとんど見られない。では、なぜチュヴァシ語ではこれらの構造が見られるのだろうか。以下、第

3 節でこれらの構造に関する通時的考察を行う。

3. 否定辞 *mar* を含む修飾構造と派生構造に関する通時的考察

本節では、否定辞 *mar* を含む修飾構造と派生構造に関する通時的考察として、1) 形動詞機能の残存説、2) ロシア語の影響による改新説、の2つの仮説を検証する。

1) 形動詞機能の残存説

いくつかの先行研究は、チュヴァシ語の否定辞 *mar* がチュルク祖語の形動詞に由来するとしている。Schönig (1999: 69) は、チュヴァシ語が古代チュルク語の否定現在時制コピュラ *ärmáz*¹³ の同源語 *mar* を保持していると述べている。Robbeets (2009: 72) は、「動詞前および1人称の否定命令で後ろに現れる否定辞 *mar* ‘no, not’ は、元の形式 *-(A)r* の痕跡を保持しているかもしれない」と述べ、チュヴァシ語の否定辞 *mar* が、チュルク祖語の形動詞(アオリスト) *-(A)r* を起源とする可能性について言及している。Savelyev (2020) は、チュヴァシ語の否定辞 *mar* が、チュルク祖語の **e(r)-me-r* [be-NEG-AOR.PTCP] に由来するとしている。

mar の起源がチュルク祖語の形動詞形であるという説に基づけば、名詞修飾の機能はかつて形動詞であったことの残存である可能性が考えられる。しかし、動詞修飾をすること(共時的に形動詞はそのまま動詞を修飾できない)、形容詞+否定辞 *mar* から動詞が派生されうること(共時的には形動詞からさらに動詞が派生されることはない)、先行要素の頻度に偏りが見られる(一部の形容詞の頻度が高い)ことは、形動詞機能の残存だけでは説明できない。加えて、同じくコピュラ動詞の形動詞形が起源であると考えられるウズベク語の否定辞 *emas* には名詞修飾の機能がない一方(筆者の観察から、類似の否定辞を持つ他のチュルク諸語の多くでも同様であることが推察される)、形動詞形が起源ではないタタール語の否定辞 *tügel* は一部の形容詞と共に名詞修飾することがある(後述)。このことは、*mar* の起源が形動詞であるとしても、それを含む修飾構造と派生構造の発展には別の要因が関係している可能性を示唆している。

2) ロシア語の影響による改新説

特に派生元となる場合に *mar* の先行要素が一部の形容詞に偏っており、それらの多くがロシア語の否定接頭辞 *ne-* を含む形容詞・副詞と対応していること、否定辞が先行要素と共に修飾語として機能したり派生元となる場合が、(調査対象の言語の中では)チュヴァシ語と同じくロシア語の影響を強く受けてきたタタール語でのみわずかに見られること¹⁴から、これらの機能がロシア語の影響によって発展した可能性が考えられる。

前節で述べたように、特に *avan*, *layăx* 「良い」、*pallä* 「明らかな」、*tërës* 「正しい」のよう

¹³ コピュラ動詞 *är-* に形動詞(アオリスト)の否定形式 *-mäz* が後続した形であると分析できる。

¹⁴ タタール語のオンラインコーパス *Corpus of Written Tatar* からは、否定辞 *tügel* に副詞派生接辞 *-čä* が付加した例が1例、動詞派生接辞 *-län* が付加した例が1例抽出された。

な形容詞が **mar** の先行要素として頻繁に用いられる。これらに対応するロシア語表現はいずれも否定接頭辞 **ne-** を含む形容詞・副詞であり (**nexorošij** 「良くない」、**neizvestnyj** 「明らかでない」、**nespravedlivyj** 「正しくない」)、いずれも使用頻度が高い。以下に、チュヴァシ語とロシア語の間の構造的並行性を示す (上がロシア語、下がチュヴァシ語)。

(22) Eto ne isvestno.	(23) neizvestnyj čelovek	(24) neizvestnost'
Väl pallä mar.	pallä mar šin	pallämarlăx
「それは不明だ」	「不明な人」	「不明」

タタール語では、限られた形容詞が否定辞を伴って名詞を修飾することがあり、それらの多くはロシア語の否定接頭辞 **ne-** を含む形容詞・副詞の直訳的表現である (例えば、**tanış tügel keşe** 「知り合いではない人」は、ロシア語の **neznakomyj čelovek** に対応している)。コンサルタントによると、(チュヴァシ語やタタール語に比べて地理的・歴史的にロシア語の影響が少ない) ウズベク語やトルコ語では、上記のような表現でも否定辞は用いられないようである。

これらのことから、否定辞 **mar** を含む修飾構造と派生構造は、ロシア語の影響で発展した可能性がある。もしそうであれば、先行要素+否定辞 **mar** が形容詞のように用いられるようになったことで、これが形容詞と同じように派生元となることも可能になったのであろう。しかし、この仮説を証明するには本稿で提示したデータでは不十分である。また、否定辞 **mar** を含むチュヴァシ語表現に対応するロシア語表現が否定辞 **ne** または否定接頭辞 **ne-** を含まない場合や、逆にロシア語の否定辞 **ne** または否定接頭辞 **ne-** を含む表現に対応するチュヴァシ語表現が否定辞 **mar** を含まない場合もある。チュヴァシ語が他のチュルク諸語から最も早くに分岐したとされることを考慮すると、否定辞 **mar** の振る舞いにもロシア語との接触以前のことが影響している可能性もあり、本稿では可能性を提示するとどめておきたい。

4. まとめと今後の課題

本研究では、まずコーパスから抽出された様々な例を観察し、否定辞 **mar** を含む修飾構造と派生構造について詳細に記述した。次に、他の主なチュルク諸語 (トルコ語、ウズベク語、タタール語) の否定辞と対照し、これらの言語の中では否定辞を含む修飾構造と派生構造がチュヴァシ語に特徴的なものであることを明らかにした。最後に、これらの構造の通時的発展に関する考察として、形動詞機能の残存説とロシア語の影響による改新説を検証した。

主な問題点としては、他のチュルク諸語に関する調査がコンサルタント 1 名ずつを対象に行った容認度調査のみであること、主な語群のうち北東語群を調査していないことが挙げられる。トゥバ語では形容詞+否定辞による名詞修飾が可能だという (江畑 p.c.)。今後は北東語群も対象にコーパス調査を含めたより詳細な調査を行い、これに基づいて通時的発展に関するさらなる考察を行いたい。最終的には、否定辞 **mar** の形態統語的振る舞いを

網羅的に記述することが目標である。

略号一覧

1, 2, 3		1, 2, 3 人称	NMLZ	nominalizer	名詞化
ABL	ablative	奪格	OBLG	obligatoriness	義務
ACC	accusative	対格	PL	plural	複数
ADJLZ	adjectivalizer	形容詞化	PN	person name	人名
ADV LZ	adverbializer	副詞化	POSS	possessive	所有
AOR	aorist	アオリスト	PRF	perfect	完了
AUX	auxiliary verb	補助動詞	PROH	prohibitive	禁止
COMP	comparative	比較	PRS	present	現在
CVB	converb	副動詞	PST	past	過去
DAT	dative	与格	PTCP	participle	形動詞
EMPH	emphasis	強調	PURP	purposive	理由目的格
GEN	genitive	属格	SG	singular	単数
IMP	imperative	命令	VBLZ	verbalizer	動詞化
INST	instrumental	具格	-		接辞境界
LOC	locative	位格	=		接語境界
NEG	negative	否定	+		複合語境界

参考文献

- Andreev, I. A., A. E. Gorškov, A. I. Ivanov et al. (1985) *Čuvaško-russkij slovar'*. [チュヴァシ語・ロシア語辞書] Moskva: Russkij jazyk. (<http://samah.chv.su/>) [最終閲覧日: 2022/12/3]
- Clark, L. (1998) Chuvash. Johanson, L. and É.Á. Csátó (eds.) *The Turkic languages*. London, New York: Routledge. 434-452.
- 江畑冬生 (2018) 「統語的要素を含む派生に見る語彙的緊密性 (lexical integrity) の問題」『東京大学言語学論集』39: 41-53.
- _____ (2020) 『サハ語文法 統語的派生と言語類型論的特異性』東京: 勉誠出版.
- Pavlov, I. P. (2014) *Sovremennyy Čuvaškij jazyk: monografija: v 2 tomax. Tom 2: Morfologija*. [現代チュヴァシ語: モノグラフィー 第2巻: 形態論] Čeboksary: Čuvaškij gosudarstvennyj institut gumanitarnyx nauk.
- Robbeets, M. (2009) Insubordination in Altaic. *Journal of Philology* 31. *Ural-Altaic Studies* 1: 61-79.
- Savelyev, A. (2020) Chuvash and the Bulgharic languages. In: M. Robbeets and A. Savelyev (eds.) *The Oxford Guide to the Transeurasian Languages*, 446-464. Oxford: Oxford University Press.
- Sergeev, L. P., E. A. Andreeva and V. I. Kotleev (2012) *Čavaš čělxi: čavaš filologi fakul'tečen studenčesem valli xatërleně věrenü këneki*. [チュヴァシ語: チュヴァシ文献学部の学生向けの教科書] Šupaškar: Čavaš këneke izd-vi.

Schönig, C. (1999) The internal division of Modern Turkic and its historical implications. *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*, Vol. 52, No. 1. 63-95.

Timberlake, A. (2004) *A reference grammar of Russian*. Cambridge University Press.

調査資料

Čävaš čělxin ikčělxellě šüpši [チュヴァシ語二言語コーパス] (<http://corpus.chv.su/>) [最終閲覧日: 2022/12/13]

Corpus of Written Tatar (http://corpus.tatfolk.ru/index_tt.php) [最終閲覧日: 2022/11/30]

The Chuvash Negative Particle *mar* as a Part of Modifying and Derivated Constructions

Yuto HISHIYAMA

(Tokyo University of Foreign Studies)

The Chuvash negative particle *mar*, like its equivalents in other Turkic languages, is primarily postposed to a non-verbal predicate to negate a sentence (e.g. *Věsem yivăr mar* [that.PL difficult NEG] ‘Those are not difficult’). In addition to that, *mar* can function as a modifier (e.g. *avan mar yapala* [good NEG thing] ‘a thing that is not good’) or be a derivational source with the preceding element (e.g. *těrēs mar-lăx* [correct NEG-NMLZ] ‘incorrectness’). However, descriptions of these functions in previous studies are inadequate.

This study first describes in detail the modifying and derivative structures containing *mar*, based on observations of various examples extracted from the corpus. *mar* is used with the preceding element and exhibits morphosyntactic behavior similar to that of an adjective: the comparative suffix can be affixed (e.g. *pallă mar-tarax* [known NEG-COMP] ‘more unknown’), and it functions as a modifier in the sentence. It may also be used as a noun (primarily as an object) in a sentence by taking the case suffix directly (e.g. *kirlě mar-a an kalaś* [necessary NEG-DAT/ACC PROH talk.IMP.2SG] ‘Don’t talk about unnecessary things’). Derivational suffixes that can be suffixed include nominalizers (*-i*, *-sker*, and *-lăx*), adverbializers (*-Ăn* and *-lA*) and verbalizers (*-lAn* and *-lAt*). Some of those with these suffixes are phrases (e.g. *pirěň yevěr mar-sker* [1PL.GEN like NEG-NMLZ] ‘someone unlike us’), while others are single words (e.g. *avanmar-lan-* ‘become unwell’).

Next, this study contrasts the negative particle in Chuvash with its counterparts in other Turkic languages (Tatar, Turkish, and Uzbek), and finds that among these languages, the modifying and derivative structures containing the negative particle are unique to Chuvash.

Finally, as a consideration of the diachronic development of these structures, this study examines the hypothesis that they are remnants of the participial function and the hypothesis that they are innovations due to Russian influence. Further investigation is needed to clarify the diachronic development.

(ひしやま・ゆうと boltwatts@gmail.com)